

# 親と子どものチャレンジ・キャンプ ～セカンドステージ～

## ■ 事業のねらい

子どもが、自ら考え進んで行動する場面を見ることで、親が我が子の成長を認め、子育てをしていく上での親の在り方を考えるきっかけとする。



- 実施日 平成23年8月10日（水）～12日（金）2泊3日
- 参加対象 小学1年生～3年生の子どもと保護者 15組（30名程度）
- 参加実績 参加者：19名（7家族）  
 小1＝4名、小2＝1名、小3＝3名  
 保護者＝9名、幼児＝2名  
 男子＝13名、女子＝6名  
 運営協力者：9名  
 地元漁師4名、厚岸町教委2名  
 ボランティア3名
- 備考 活動場所：厚岸少年自然の家及びその周辺

## 1 事業実施の背景



家庭はすべての教育の出発点であり、子どもが基本的な生活習慣・生活能力、倫理観、自立心や自制心、社会的なマナーなどを身に付ける上で重要な役割を果たしている。しかし、近年の都市化や核家族化、少子化、地域における地縁的なつながりの希薄化など、家庭や家族を取り巻く社会状況の変化の中で、家庭の教育力の低下が指摘されている。平成20年度に文部科学省が行った「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」においても、約8割の親が家庭の教育力の低下を感じている。

本事業は、小学1～3年生の児童が、3日間子どもだけでテント泊や地引網体験、獲れた魚介類を使った夕食づくりを行う。その間、保護者は子どもの活動と近接する場所においてワークショップや交流会を行い、日頃の子どもの接し方について考える機会を提供するとともに、子どもが事業で得た自信や学びを親子で共有し、子どもの成長について考えるきっかけづくりを目的とする。

## 2 プログラムデザイン

		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	宿泊場所
8/10 (水)	子	集合・受付 12:30～13:00							受付	開会式	仲良くなるう	テント設営 (ネイバル屋外)		夕食 (炊飯)	入浴	自由時間	就寝準備	就寝	ネイバル屋外 (テント泊)
	親										趣旨説明	夕食づくり (ネイバル)			後片付け	入浴	自由時間	就寝	ネイバル 宿泊室 (室内泊)
8/11 (木)	子	起床	洗面・清掃	朝のつとめ	朝食	海のお仕事体験 (筑紫恋海岸) ※昼食：海辺でバーベキュー			夕食づくり (ネイバル)		夕食 (炊飯)	入浴	親への手紙	就寝準備	就寝	ネイバル屋外 (テント泊)			
	親					貝殻拾い (若竹海岸周辺)	海辺でバーベキュー (ハラサン岬)	ジェルキャン ドル作り体験	休憩	ティーブレイク 【子育てトーク】		後片付け	入浴	保護者 交流会	就寝	ネイバル 宿泊室 (室内泊)			
8/12 (金)	子	起床	テント干し	朝食 (炊飯)	テント撤収	解散 11:30													
	親		朝食づくり		朝食の後片付け	映像による ふりかえり	閉会式												

## ■ アクティビティについて



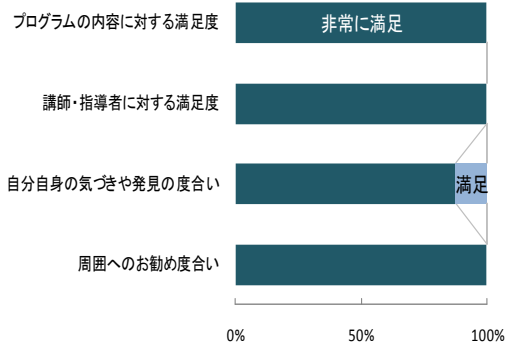
## ■ 企画の意図

- 衣食住の中で、特に食と住に焦点を当て事業を企画した。食に関しては、海に近接する当施設の特徴を生かし、地元漁師の協力のもと地引網体験を取り入れ、獲れた魚介類を使った夕食を保護者に振舞うこととした。このことによって子どもたちの達成感を喚起するとともに、毎日の食事づくりの大変さを知り、保護者への感謝の気持ちを育むことをねらいとした。
- 住に関しては、子どもたちだけでのテント泊とした。設営から撤収まで保護者の助けを借りず全て子どもだけで行い、事業を通じて自分のことは自分でやろうとする気持ちを持たせ、子どもの成長や自立を促すきっかけとする。
- 近接する場所で親子が別々のプログラムに取り組むことによって、保護者は我が子や他の子の様子を随時観察し、子どもの成長を見取り、これまでの我が子との接し方を振り返るきっかけとする。

## ■ 留意事項

- 夏の事業であるため、熱射病・虫・水辺の事故防止対策を十分行った。
- 刃物や火気使用等調理に伴う安全管理体制を徹底した。

### 3 活動の様子



### 4 事業評価



### 5 まとめ



#### ■ 活動の様子

初日、子どもたちは初めて出会った仲間と協力してテント設営を行い、最終日までテントで宿泊した。

翌日は、近郊の筑紫恋海岸へ移動し、地元漁師の協力で地引網を体験。炎天下の中、額から汗を流しながらの作業であったが、全員で網を引き、カジカやソイ、アイナメなどの魚が姿を現した時には大きな歓声があがっていた。

施設へ戻ると休む間もなく夕食づくり。メニューは地引網で獲れた魚を中心にアイナメのカルパッチョや鮭のムニエル、アサリスパゲッティーなど6種の洋食メニューを作り上げた。魚を切ることは勿論、包丁を握ること自体初めてという参加者が多かったが、保護者に美味しい料理を食べてもらいたい一心で果敢に挑戦していった。その間保護者は、施設周辺を散策しつつ貝殻拾いやバーベキューを行ったほか、ジェルキャンドル作りなどを行い、保護者同士の親交を深めた。

保護者を招待するスタイルで行われた夕食会では、どのテーブルでも、その日の地引網や夕食作りのことを夢中で話す子どもの姿が見られた。

最終日は、映像でそれぞれの活動を振り返ったのち、我が子への思いを綴った手紙と、3日間のチャレンジを描いた絵手紙を親子で交換し合い、事業を締めくくった。

#### ■ 参加者（小学生）の声

- テントのなかでねれるようになった。(小2)
- じびきあみで魚がいっぱいとれてうれしかった。(小3)
- りょうりで、おさかなをきるのがとてもはやくなつてうれしかった。(小1)

#### ■ 参加者（保護者）の声

- 子どもに考えさせ、ある程度の責任を持たせることで更に成長することを実感した。(母)
- 親と子が付かず離れずの距離で生活できたのが良かったです。(母)
- 保護者の交流会で色々な親の話を聞いてよかったです。(父)

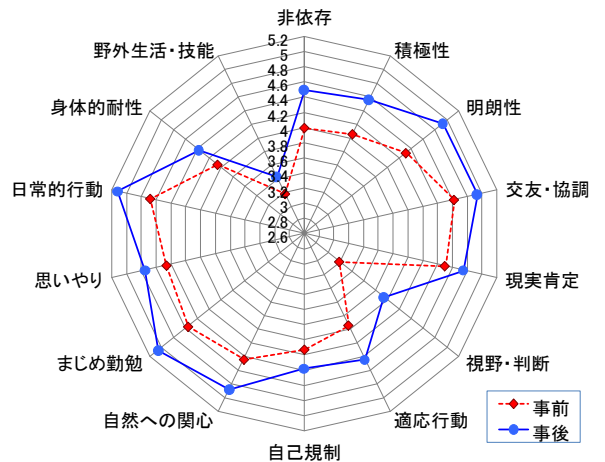
#### ■ 参加者の変容【IKR調査結果】

全体としては、5.9ポイントの向上の変容が見られた。大きな変容を示したのは「視野・判断」であり0.75ポイントの向上が見られた。続いて「明朗性」が0.63ポイント、「非依存性」「積極性」「適応行動」がそれぞれ0.5ポイント上昇した。

#### ■ 結果の分析・考察

「視野・判断」の向上については、3日間保護者の助けを借りず自分たちの力で全ての活動に取り組んだことから、先を見通した計画立案や自分で課題を発見する能力を身に付けたものと推測できる。

「明朗性」については、3日間の事業を乗り越えた自信に起因するものと推測できるが、特にテント泊による仲間との交流の中で培われたものが大きいと判断する。



#### ■ 成果

- 5月のファーストステージから難易度を上げ、食材の調達方法を地引網とし、就寝場所も宿泊室からテントへ変更した。このことによって更なる充実感を味わわせることができた。また、地引網体験及びテント設営は、決して一人では成し得ないことから、仲間と協力することの大切さや楽しさを実体験から学ばせることができた。
- 前回を継承し、開閉会式、食事、ふりかえり以外の全ての時間において、近接する場所で親子が別々の活動に取り組むプログラム構成とした。このことによって、保護者が我が子や他の子どもの様子を随時観察することができ、保護者の「子ども観」を見直すきっかけとすることができた。
- 座学中心ではなく、野外での調理や海辺散策、ジェルキャンドル作りなど体験活動をとらえて保護者同士の距離を徐々に縮めるプログラム構成とした。このことによって活動の中で自然と会話が生まれ、交流会では日頃の子育てに関する思いや悩みを十分に交流することができた。アンケートには、「全く面識のなかった人たちとこんなに仲良くなれるとは思わなかった」「皆同じ悩みを抱えていることが分かった」と多くの保護者が感想を寄せていた。

#### ■ 課題・今後の方向性

- 子どもたちは夏休み期間中であったが、平日の開催であったため、7家族19名の参加であった。多くの成果を得られた事業であるため、保護者が参加しやすい日程への変更が必要である。同時に、事業で生まれた保護者同士のネットワークを生かし、今回参加できなかった又は関心がなかった保護者へも事業の成果を広め、青少年教育施設が開催する事業等への参加を促す方法を検討する必要がある。